

「誠実、無欲、色でいえば真白な人、不実、貪欲、色でいえば真黒な人、そんな人はいずれも現実にはいません。いるのは、そのどちらでもない灰色の人でありましょう。比較的白っぽい灰色から、黒っぽいまで…とにかく人間は、灰色において一色であります。その色分けは一人の人間においても、一定ではなく、白と黒との間をゆれ動いている者同士の分別に過ぎません。灰色は人生の色というべきでありましょう」（故藤木正三牧師）。

上記の意味合いで言うならば、イエスの弟子ペトロは、“灰色の人”の象徴であるように感じます。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」（26:35）と勇んで誓いを立てるのがペトロであれば、身の危険を感じて「そんな人は知らない」（26:69～）とイエスを見捨ててしまうのもペトロです。本日の箇所では、「わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください」とイエスを信頼して踏み出すのがペトロであれば、「強い風に気がついて怖くなり、沈みかけ」、「なぜ疑ったのか」とイエスから言われてしまうのもペトロです。どちらも、偽らざるペトロの姿です。イエスへの信頼と疑いの間を揺れ動くペトロの姿は、白か黒かでは言い表せない灰色の人間像を言い表しているようにも思えます。当時、気候の変動によって、人を飲み込んでしまうかのようなうねりを見せる海や湖は、混沌とした諸悪の力の住処として理解されていました。そんな湖の上で、逆風のために波に悩まされているペトロら弟子達の姿は、迫害のうねりの中に置かれていたマタイ福音書時代の教会の姿、そしてこの世の荒波に悩まされる私達の姿をも言い表していると言えます。しかし、そんな揺れ動く私達の姿とは対照的に、「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と語り、その湖のうねりを足元に治めながら、動じることなく歩くイエスの姿を聖書は描きます。

ふと気づくとそこにある、私達を飲み込んでしまうような巨大なうねり。その闇はあまりにも深く、混沌として、嵐はいつまでも静まらないように思えます。しかし、そうして私達の名（力）が小さくされていく時に、「御名を崇め（大きく）させたまえ」と祈り、私達の理解をはるかに超えた神の名（御業）があることを忘れないでいたいと思います。もちろん、そのようにして歩み直してもなお、灰色のなかを歩む私達は、ペトロの様に強い風に気づくと、再び怖くなり、沈んでしまいそうになるかもしれません。しかし、その湖の上は、「なぜ、疑ったのか」と言われながらも、私達の手を取り、「本当にあなたは神の子です」と告白できる時へと導き出して下さる、主イエスが立っておられる場所でもあるのです。

（文責：望月達朗牧師）

